
空の向こう

ふあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の向こう

【Nコード】

N7891B

【作者名】

ふあ

【あらすじ】

「私ね、今日死ぬんだ」うん、私は死ぬのなんて怖くない。この世界が大嫌いだから。そんな私は最後の日、始めて「生きていたい」と願った。残り少ない時間で、ひたすらそう願った。

1・最後の日

コンクリートで固められた、窓も無い教室ほどの大きさの部屋には、たくさんの人が居た。大人や私より小さい子供など、パツと見て四十人程の人がその部屋に押し込められている。

それだけの人がいるのに誰も喋りもせず、微かな人の気配が感じられるだけだ。でもその雰囲気は、これからの私たちの運命にはびつたりだと思った。

私たちは、もうすぐ死ぬ。いや、殺されるのだ。でもだれもそれを咎める事は無い。これは、崇高な儀式。そう、人類がこれからも行き続ける為の儀式なのだ。……少なくともそうらしい。

ぼんやりと、私はそんなことを考える。

用意されたパイプ椅子に座った私たちの列と向かい合って、一人の男の人がさつきから何やら話している。ピシッと、政府のどこかの制服を着て、正面の教卓のような机に片手を置いて熱弁を振っている。

なんとか集中して聞き取れたのは、あなたたちの死は無駄にはしないだとか、これは人類の為の尊厳ある死なのだとか、このようなことが一刻も早くなくなるように一層科学の発展を目指すという抱負だとか、そんなどうでもいい内容だった。周りを見ても、彼の話を聞いていると思われる人は見られず、誰も彼も自分の世界に引きこもってしまったているようで、ただ目の前の空中を見つめている。

だから、その人は何も無い空気に語りかけているようにしか見えなかった。ギャグではよく見たことがある光景だけど、今はおもしろくもなともない。

最後に、残された家族への給付金の話で締めくくって、演説は終わった。

あーやれやれやっと終わった。普段なら、ここで伸びでもするとこだが、今の状況では流石にそんな気にはならない。

いよいよだ。

列の前に長机が置かれ、列の数だけ置かれた椅子に、看護婦のよ
うな格好の女の人たちが座る。私の位置は、一番右端の前から三番
目のところだ。わりと、各列の先頭の様子が伺える。

看護婦の正面に置かれた椅子に、先頭の人達が座り、その人たちが
差し出した片腕に、淡々と、手馴れた様子で注射針が刺されていく。
その様子は、今まで何度かした事のある予防接種と特に変わりは無
い。

やがて、私の名前が呼ばれた。

「はい」

と返事をして私は立ち上がった。椅子に座って右腕の袖をまくる。
担当である、なんとなくプロっぽい感じがする年配の看護婦は、突
き出された腕の裏側の肘辺りを指で押さえ、

「刺したときちよつとちくつとするから、我慢してね」
と、よく聞く台詞を言った。

基本的に私は注射が嫌いだし、ちくつとする感覚も嫌なのだが、
ここまで来てそんなことは何も気にならない。というか気になるわ
けが無い。

私は頷いて、彼女が持っている注射器を睨みつける。細長い部分
に、透明な液体が詰まっている。

注射針って、先が斜めに切れてたんだ。今まで目をそらしていた
から気付かなかったけど、最後に知識が一つ増えたのは良かったの
かもしれない。それ以外にいいことは何一つ無いけど。

その針の先がずっと腕に吸い込まれ、すこしずつ中の薬品が押し
出されて私の血液に溶け込んでいく。

これが、もうすぐ私を殺すのだ。私の命を奪う薬が、何の抵抗も
なく一体化していく。

何でこんなにも落ち着いて見ていられるのか、全く持って自分で
も不思議だ。まるで他人事みたい。でもこれは、紛れも無く私の生
身の腕なのだ。

脱脂綿で傷口を押さえ、再び椅子に座る。
出血は、すぐに止まった。

2・とある公園のある日の風景

二年前に買ったばかりの薄い青色の自転車は、三週間ぶりに私を乗せて、春の匂いの中を突き抜ける。

穏やかな風が、私の前髪をあたり、優しく頬をなでる。たまらなくなつて、私は小声で鼻歌を歌いながら、ゆつくり自転車をこいだ。久しぶりに見上げた空は雲ひとつなくどこまでも晴れ渡っていて、どこもかしこも自転車と同じ色に染まっている。日曜日のある暖かい春の午後。春休みの二日目。空は高く、果てなんか無いみたい。こんなに空つて広がったんだ。

今まで十七年間ずっとその下に居たはずなのに、一度もそのことに気付かなかつた。まあ、それかもしれない。私はこの世界が大嫌いなのだから。

戦争とか飢餓とか、そんなのは昔から絶えなかつた。人災なのだから、人がいる限りなくなる事は無いのかもしれない。更にそれを無くす為に科学が発達して、その中身は私はよく知らないんだけど、まあいろいろあるんだろう、問題はその結果だ。医学が発展して人は死ににくくなり、果ての無い人口爆発が続く、ついに世界の人口は九十億を越えた。食糧生産も追いつかず、ついに人は人を殺す事にしたのだ。

各国でそれぞれ定期的にランダムに人間を選び、一斉に死を迎えさせる。増えすぎたから殺すなんて、何と単純明快で馬鹿馬鹿しい仕組みだろう。この私でもばっちり理解できる。そしてその記念すべき第一回目選ばれた私は、なんと運が悪いのだろう。呆れすぎて言葉にならない。

私はこの世界が嫌いだ。

もう人間は、同種を殺さなければ生きていけないのだ。その時点で人間なんてもう終わっている。そんな人間が作った世界がいいところなわけが無い。もし悪いところではないのだとしても、この世

界は生きにくいのだ。無理矢理周りに溶け込んでいる振りをして、作り笑顔でなんとか一日を終えて、それでも陰口や妬みなんかが残らない世界。そんな本質に気付いたとき、私は世界が嫌いになった。時間が経つにつれて、それは嫌いから大嫌いに変わり、そのマイナス傾向は現在進行形で続いている。

だからこの澄み切った青空も、本当は、嫌いなものの一部にしか過ぎないのだ。砂漠に咲く一輪の花、そう言えば聞こえはいいのかもしれない。でも、花はいつか枯れるのだ。

家から少し離れたところにある公園で、私は自転車を止めた。

ブランコのそばにある時計を見ると、二時を少しまわっていた。話によると、注射をしてからだいたい十から十四時間後くらいに心臓に薬が効き始めて死ぬのだそうだ。勿論個人差があつて、すぐに死んでしまうこともあるらしい。十二時ごろにあのコンクリートの部屋に集まったから、普通に考えれば、まだ半日近くある。

といっても、なんとなく来てみただけだったから、することなんてないんだけど。

ぶらぶら散歩することにした。小さな子供達がそこら中を走り回り、もう少し大きな少年達は向こうの広場で野球をしている。すぐ側のベンチでは、女の子達がきやあきやあ笑いながらおしゃべりにいそしんでいる。

そして、その反対側のベンチでは……。

「あ」

思わずそう呟くと、そのベンチで鳩に餌をやっていた少女が振り向き、

「ああ」

と、似たような声を出した。

私は、肩ぐらいの黒髪で、すこし鋭い目をしたこの彼女のことを知っている。名前と同じクラスだったということを知っている。新学期になったらクラス替えがあるので、それで元から薄い縁も完璧に切れると思われるクラスメート。もちろん、私に新学期などあり

えないわけなんだけど。

普段の、人と話すのが苦手な私なら、そこでバイバイとなるとこるだが、なんととはなしに、彼女と話してみようと思った。明日がなくなる、今日の私は少し大胆になるらしい。

「何してんの？カノちゃん」

「んー。鳩に餌やってんの」

いや、見りや分かるって。とつつこむのは失礼だろうか。でも聞いた私が悪いのだろう、きつと。

「……いつもやってるの？餌やり」

「いーや。朝のパンが残ったから、捨てるのもったいないし」

そう言って彼女は、手に残っていたパンくずをくしゅくしゅと両手ですりつぶして空中にまいた。バサバサと羽音を立てて鳩のピンク色のくちばしが欠片も残さずにつまんでいく。

「終わっちゃった。何やってんの？こんなところで」

両手と服に付いた粉を払いながら、彼女は私に尋ねる。

「いや、ちよつと散歩をね」

「ああ、あたしと同じだ。でも物好きだね、ここなんて何も見るもの無いのに」

ちよつと考えて、私は返す。

「私ね、今日死ぬんだ」

手を止めて、彼女はこちらを振り返った。僅かに目を見開き、二度瞬きを繰り返すと、

「そうなんだ」

そう呟いて再び粉落としに励む。

冗談だと思われるのはわかっていた。だけど、そりゃないよ。これは馬鹿にされてるんだろうか。

「死ぬって、どうやって」

「えつと、安楽死だって」

確かそう言ってたはず。

それを聞いて、彼女はふうん、と頷いた。

「大変だね。まだ若いのに」

3・カノ

この、増えすぎた人間を減らす政策は殆どの人には知らされていない。まして、一般大衆の一人に過ぎない少女が知っているなんてありえないはずだ。やっぱり、彼女は知ってはいなかった。喋るなとは言われていないので、私はこのくだらない儀式について彼女に説明すると、驚いたように黙って聞いていたが、やはり私が思っていたよりも、大分反応は薄かった。他の人には誰にも言っていないので、普通の反応がどういうものかはつきりとは分からないけど、それでも彼女は不思議なくらい冷静だった。

私は、元クラスメートのカノという少女と、道を歩いている。ろくに話したことも無い、きつと死ぬまでそうだろうと思っていた彼女と今一緒に散歩をしているというのは、なんとすごい偶然だろう。やっぱり人生は何があるか分からない。

「家に居なくていいの？」

「いいの、最後の日だからこそ普通にしたいから」

家にこもっていたら、よけいな事を考えてしまいそうで怖いというのもあったが、すぐに弱みを見せることに気がのらなかったの言わない。あまり親しくない人に弱音を吐くのは、やっぱりなんだか気が引ける。これが先ず私の人当たりが悪い理由なんだろうけど。

「家族とかは？」

「普通にした方が良いつて、家族から言っただんだ。だから」

「そうなんだ。優しいんだね」

その言葉に少し誇らしくなって、そうかな、と言いながら曖昧に笑った。

左手にある公園の桜並木がある。そこから、たくさんの桜がそれぞれの枝を伸ばして、道を行く人々につばみや、今年始めて咲いた花を見せ付けている。まだ三割ほどしか咲いていないけど、来週にはきつと半分は咲くだろう。新学期になれば、きつと満開だ。

……私には、関係ないことだけど。

「あー、桜が咲いてる」

私の視線に気付いて、隣の同級生が間延びした声を上げた。

「今年は遅いね。去年は終業式には半分くらい咲いてたのに」

「でも、新学期には全部咲きそうだ」

いや、私はそのころにはいないんですけど。

「満開になったときに、突風でも吹いたらすごいきれいだよね」

「でも突風なんて吹いたら全部散っちゃうよ」

「散っちゃうけどさあ。でも、なんか風が目に見えてるみたいでもない？くるくるなっけたりしてたらもつと」

いや、また一年待たないといけなくなるのに。

そう言おうとしたが、彼女の子供みtainな笑顔を見ると、そんな突っ込みはどうでもよくなった。

というか、こんな笑顔だったんだ。

私が普段見るカノという少女は、あまり人と関わらない子だ。休み時間などに皆が塊をつくって、私がそこに必死でしがみついているときでも、平気で一人でいられる。みんなは変わった子だと言って、私も少しそう思っていたりしたけど、一人でいても平気な彼女をうらやましく思ったりもした。

みんなの側にも常にも一人ぼっちだという感覚が付きまとい、それでも明日も仲間に入れてもらう為に、みんなと同じタイミングで笑顔を作ったが、それは私の神経を大分すり減らし、私は一人でいられる彼女の勇気が、うらやましかった。彼女はたいてい独りでいた。

だから、今すぐそばにあるその笑顔はとても新鮮だ。つくりものだという感じがなくて、あどけない、こんな顔で笑える子を私はとつさに脳内で検索したが、該当する子は誰一人見当たらない。

「そういえば、宿題終わった？」

突然彼女が言った。

「え、宿題？」

私がやっても意味がないだろう。

「終わってないよ、いや、私がやってどうするの」

「なんで?……あ、そっか」

これがわざとなら流石にプツンきていただろうが、その顔からは全くそんな気配は感じられない。これが演技なら、まさに神だ、というぐらいきよとした顔をしている。

「そっかあ、ごめんごめん」

そう言い、右手の指を揃えて手を縦にしてごめんのサインをしなからすまなさそうに言った。

これは、忘れるようなことなのだろうか。攻める気はないけど。

4・心

「どう思ってるの？」

しばらくして彼女が言った。

「何が」

「死ぬこと。嫌じゃない？」

「だって、もうしょうがないし」

それに、と私は付け足す。

「私、ここで生きるのもう疲れたんだ。」

「疲れたの」

「うん。何ていうのかな、こんなくだらないことをするぐらい人間は末期でさ、そんな人間の世界で生きるのに疲れた。もう笑わないでいいなら、いつそ楽かな」

「笑いたくないの？何で」

ああ、彼女はあまり笑わないから、分からないのかな。

「作り笑顔とか。みんな集まって笑ってたりするでしょ、でもあれって本当に楽しいのは一部の人だけで、私みたいに不器用な人は周りで楽しいふりをしてるだけでさ。結構疲れる」

「何で不器用なんて言うの」

「私ホントは、騒いだりするのには苦手なんだ。本読んでたりするほうが楽だし。みんなの中に上手く入りたいけど、不器用だから上手くないんだ」

こんなに本音を言えるのは、これが最後の日だからだろうか、それともあまり知らない彼女だからだろうか。

「だから、正直力ノちゃんがうらやましい」

「へ？あたしが？」

ふいをつかれてつい声が裏返ってしまった彼女に、私はつくりもので無い疲れた笑顔を向けた。

「一人で平気でいられたら楽だなあって」

これは失礼かもしれない。

そう思ったが、私の気を使う神経は、磨り減りきって使えなくなってしまうみたいだ。

彼女も、つくりものでない笑顔を向けた。

「あたしも、うらやましかった」

それを聞いて、一瞬思考が停止する。

何が、と言うと、私の名前が出される。

「あたしね、あまり平気じゃないんだ。でも、みんなのところに入るにはどうしたらいいか分からなくてね、しょうがないからずっと独り。みんなのところにいられるのがうらやましい」

「……そうだったんだ」

うらやましいなんて言われた覚えがないので、私は死刑宣告された日から一番驚いた。一度頷いて、彼女は私の言葉を肯定した。

やっぱり、寂しかったんだ。

「上手くいかないよ、ホントに」

「だね」

今度は私が頷く。小さく唸りながら伸びをした。

「あーあ、もうやんなっちゃった」

「やっぱり死ぬのは怖くないんだ」

全然、と言いながら、私は作りものでない筈の笑顔を浮かべる。

「じゃあ本当に嫌いなんだ。この世界が」

「カノちゃんは嫌にならないの」

「あたしは……」

あー、と何か考えるような声を漏らし、最後に一度くしゃみをしてそれについては何もふれずにしゃべりだす。

「まだいいかな。あたしもこの世界は全然好きじゃないし、むしろ嫌いだけ。でも、まだここで生きられないぐらいじゃない」

「死にたいとか、思わない？」

「そりゃ思ったりするけどさ、でも、諦められないし」

私は首を傾げた。

上手くいかなくて、むしろ嫌いなものののに、どうして諦められないんだろ。なんで絶望してしまわないのか、私には考えても分からない。

「何で」

「うー、何でだろ」

眉間に容赦なくしわを寄せ、上目遣いに前を睨んで考え込むのを、わたしはただ黙って眺める。私の質問にこんなに悩んでいるのを見て、彼女には悪いが、暖かさを感じて思わず微笑んでしまいそうになる。

ようやく、彼女は口を開いた。

「確かに、苦しいこととか、息ができないくらい辛いこともいっぱいある。でも、そんなにひどくないこともちよつとはあるからさ。そのちよつとがあるから、あたしは諦められない……んだと思う」「ちよつとつてどんな」

「例えば、ほら、鳩に餌やったり、桜を眺めたりこうして話したり、いろんなこと。辛いことに比べたら大分数は少ないけど、今は、幸せだよ」

幸せ、そんな言葉を、私は素直に相手に出せるのかな。

「考えなしだからあんま先のこととか考えないんだ。だから、今幸せだったらそれでもう死にたいなんて思わなくなる。」

そう言つて、また笑った。

私にも、彼女の言うような幸せを感じることはある。けれど、それでも次にまた苦しいことがあるんだつて思つたら、幸せはただの苦しさの中継地点にしかないえない。

「でも、次の瞬間にはすごく嫌なことがあるかもしれないのに」

「うん。でも、ないかもしれないし、もつといいことがあるかもしれない」

私もそう考えたことはあつた。でも前向きに生きるには私は弱すぎる、筈だ。

「幸せはいつか終わっちゃうけど、苦しいのもいつか終わるし。」

明けない夜明けは無い、そのぐらい知ってる。

でも無理なんだ。私は弱いくて駄目なんだ。生きられない。

「それにもっと、幸せだあっていうことはいっぱいあると思うからさ、わざわざ死のうとは思わない」

そっだよ。死んだら、本当に何もできないんだ。

彼女は言葉どおり、幸せそうな笑顔でこっちを見た。とても温かい笑顔で。

「ごめん、なんかこっちがすつきりした。今までこんなこと誰にも言えなかったし。一緒にいられて良かった」

私の話にこんなに真剣に答えてくれる友達は、今までいなかった。

うん、私もだよ。

そう言おうとしたのに、何故か言えなかった。

ただ、突然涙が私の両目から溢れ出して止まらなくなった。手で押さえた口元から嗚咽が漏れ、肩が痙攣するように震えた。

どうしたの、と驚いてこっちを窺う瞳が滲んで見えたけど、ひたすら私は泣く。

「もう止めて」

そう咽から搾り出す。

え、と言う小さな声が聞こえた。

「もう笑わないで。これ以上一緒にいたら、私は友達になりたくなる。でももう無理なんだ、私には時間がない。死にたくなる、死ぬのが怖くなる！」

一度そう叫ぶと、止まらなくなった。

「嫌だあああ、死にたくない、死にたくないよお」

道を歩く人が、なにごとかと立ち止まって見てくるが、そんなのはもう気にならなかった。

「一緒に生きてたい、一人で死にたくないよ。私も友達になりたいのに、なのにもう時間がないんだ、もう駄目なんだあ」

本気でそう思った。彼女と友達になって、もっといろんな、くだらない話でも何でもいろいろ話したりしていたいと、見えない誰かに

懇願した。私の話をこんなに真剣に聞いてくれる人が、同じクラスに一年もいただなんて。

なんで今まで話さなかったのだろう。なんでそんな人と一日しか一緒にいられないのだろう、それも最後の日に。

世界をとことん憎めば、死ぬのなんか怖くなくなると、半年前に思った。そしてその計画はほぼ成功していた、筈なのに。筈だったのに。生きてさえいればそこにあるはずだった、いろんな幸せというものに気付いてしまった。死ぬのが、怖くなった。

それを教えてくれた彼女を憎んだりなんかしない。ただ、最後の日にそのことに気付いたということが悔しくて悔しくて、ただひたすら泣き続けた。

死にたくない死にたくないと呼ぶ私の周りに、小さな人ばかりができたが、だれも近寄ろうとはしない。でも、背中を優しくなで続ける手の暖かさに安心して、私は涙を無理矢理止めようとはしなかった。

5・空の向こう

自転車を止めたままにしていた公園のベンチに戻っても、私はまだしゃくりあげていたが、それに愛想を尽かすこともなく、彼女は背中に片手を添えていてくれた。泣くな、と言われたいのが嬉しくて、なかなか涙は止まらない。

ようやく一息ついて、私は右腕で目をこする。

「ありがとう。ごめん、いきなり泣いて」

「うん。落ち着いた？」

うん、と私は頷く。やっと普段の呼吸法を取り戻す事ができた。

「やっぱり嫌だよ。死ぬのは」

そして、それだけ呟く。

世界の汚さを知ってから、心の中に分けの分らないもやもやしたもののがずっと居座り続けていた。そしてそれは、ときには吐き気をもよおすほどにもなり、私を数年来苦しめたが、今公衆の面前で思い切り泣き、少しそれは無くなったような気がした。

でも、頭の中は、何だか霧がかかったようにはつきりとせず、ぼんやりしていて、目の前の景色にも現実味が感じられない。向こうの方でボールを追いかける小学生達も、犬を連れて歩く老人も、木の下ベンチで本を読む若い女の人も、木のざわめきや鳥の鳴き声という音でさえ、どこかとても遠いところにあるもののように見えた。

もうすぐ、私とはなんの関係もなくなる場所。

「空が高いよー」

突然、隣で同い年の少女が言った。

「うん」

小さく頷いて、私も上を見上げた。

数時間前と何も変わらない、青いきれいな空がどこまでも広がっている。私がもうすぐ行くところ、のはずだ。果たして、そこに私

の居場所は在るのだろうか、と少し首を傾げた。

「空の上って、どうなってるんだろうね」

何気なく声に出した。

「そりゃあ、高くてさあ、そこからだったらきつと全部見えるんだよ。海も山も誰でも、外国も」

何気に答えになっていないが、それはまあ別にいいか。

「でも、見てるだけじゃつまんないよね」

「じゃあ見に行ったらいいじゃん」

へ、と間抜けな声を出して私は隣を見た。やっぱり彼女は笑っていた。

「だって、空の上にいられるぐらいなら、行けるはずだよ。自分の好きなところに」

「そりゃそうだろうけど」

「そしたらさ、今まで知らなかったところにも、どこにでも行ける」
死んでからの話なのに、その目はむしろ好奇心で輝いて見えた。どこまでも前向きだ。

「でさ、もし空にいくんなら、そしたら……」

珍しく言いよどんでいる。何、と聞くと、やがて決心したように言った。

「また会って話してくれないかな」

つまり、私は幽霊になるってことですか。

信じていないわけではないが、まさかそうくるとは思わなかった
ので、しばらく沈黙が続いた。

何か思い塊がすつと体から抜けていったような感じがした。

いいじゃん、のってみるよ。

「いいけど、見えないかもよ」

「大丈夫」

何が大丈夫なのか分からないが、彼女は嬉しそうに笑いながらピースしてみせた。つられて私も指を二本立てて突き出す。

「あたし、よく分かんないけどさ、友達になれたかなあ」

戸惑いがちに言うのを見て、

「うん。だから、絶対会いに行く」

と、私は大きく頷いた。

さっきまで泣いてたくせに、もう笑っている自分に呆れたが、つくりものでない笑顔はとても気持ちよかった。

確かに、今私は生きているのだ。かすんだ景色が色を帯びた。遠いところにあつた世界は、今は私を包んでいた。

陽が傾き、空が赤く染まるころ、私達は手を振った。

「またね」

と普通に言ってくれたのが、とても暖かった。

夜の十一時ちよつと過ぎ。部屋の窓枠に頬杖を付いて、外を見る。黒々とした視界に、数え切れないほどのたくさんの家の小さな明かりが灯っていて、まるで星みたいだ。もちろん夜空には本物の星がある。人間のものよりはいくらか少ないけど。

今日は、半月だ。

未練がないなんて言わない。後悔してないなんて口が裂けても言えない。やり残したことだらけだ。勿論世界は汚いし、好きではない。

でも、この数時間で、そう嫌いでもなくなつた。

思えば、そんなに嫌なことだけでもなかったかな。学校に行つても、楽しいと感ずることはあつたし。ただ私は、死ぬ直前までそれに気付かなかつただけで。

私の思考つて、単純すぎる。

でもきつとそれが丁度いいのかもしれない。晴れと雨がころころ入れ替わるように、悪いことと良いこともすぐ入れ替わるものだから。それに生きてる間に気付けたんだから、それが最後の日であつ

ても私にしては上等だ。

でも、と私は立ち上がって電気を消しながら思う。

私が世界に絶望して一人ぼっちで歩いていた時間があつたのは、確かだ。寂しくて寂しくて、いつもいつも孤独を噛み締めて、でも生きていくなんてこんなもんだと思った。幸せなんて見ようともせず、汚い部分だけを見つめて歯を食いしばっていた。表では笑っていたが、心の中ではいつも泣いていた。

布団にもぐりこむ。まだ春は始まったばかりだけど、寒くはない。できれば、そんな寂しい思いをする人がいなくなつてほしい。それでずっと生き続けるのは、辛すぎる。世の中、私みたいに単純な人ばかりではないだろうから、それだけじゃ救われない人もたくさんいるだろうけど。でも、折角こんなきれいな空の下に生まれたのだから、ほんの少しの幸せに触れて、そしてみんな心の底から笑えれば。きっと、人は人を殺さなくてもよくなるだろう。一人ぼっちで泣くこともなくなつて、そうしたら、大嫌いが嫌いになるかもしれないし、嫌いがそうでもなくなるかもしれない。ちょっとは、この世界が好きになれるかもしれない。

視界には、月明かりに照らされる天井がある。いつもと同じ光景。私を包んでくれるものの一つ。

「おやすみ」

次に眼を開けば、いつもと変わらない朝日が私に触れるだろう。そんな夢を見ながら、私は眼を閉じた。

5・空の向こう（後書き）

私の人生観だらけの話になってしまいました……。それでも目を通してくれた方、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7891b/>

空の向こう

2010年10月8日14時43分発行